

第三百七十六回 青葉会

平成二十九年七月二十七日(木)

午後五時半〜八時半 文京区民センター

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 川口孤舟 久米五郎太 豊田ゆたか 中野一灯 山内天牛
伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子
宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 渡邊盛雄
赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 後藤保明 小西弘子 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎
早川允章 福島正明 M H氏 村田くに子 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

九点

☆ 手の蛍見知らぬ女(ひと)の手に移す

堂哉

(猛・万・彦・保・龍・灯・正・天・)

八点

◎ (☆↓)「てのひらの蛍を見知らぬ女(ひと)の手へ」

三

恵洲 (眞・猛・孤・千・灯・M・正・天)

六点

☆ ◎ そうかもう君はいないか夏銀河

ゆたか

(堅・猛・万・孤・五・弘)

(☆↓)「然(さう)かまう君はゐないか夏銀河」

五点

☆ 黙々と梅を干している妻の背や

健介

(眞・堅・万・保・龍・天)

(☆↓)「黙々と梅を干し次ぐ吾妻の背」

四点

☆ 書生つぼさ抜けぬ畏友と暑氣払

紀久男

(堅・万・眞・龍・ゆ)

☆ 朝顔が今朝も挨拶窓越しに

猛

(眞・万・保・千・ゆ)

(☆↓)「朝顔のお早う今朝も窓越しに」

三点

青揚羽案内(あなう)に立てる木下道

五郎太

(孤・彦・保・正・三)

☆ ◎ ソプラノの胸元張りて夏舞台

ゆたか

(猛・万・孤・弘・灯)

(☆↓)「胸の張り佳し」

二点

☆ ◎ 海鞘(ほき)噛めば三陸の汐香り立つ

一灯

(万・孤・ゆ・敏・く)

(☆↓)「海鞘噛むや三陸の汐の香りたつ」∴原因結果的活用をしない

一点

☆ 風鈴に嬰(やき)ゆつくりと笑ひけり

けい子

(猛・万・五・龍・M)

(☆∴嬰兒の笑いの形容に「ゆつくり」はたいへん相応しい)

〇点

眼底に夏の海有り手術室

全

(紀・五・保・弘・ゆ)

☆ ◎ 夏歌舞伎海老蔵親子宙を行く

天牛

(眞・紀・万・孤・敏)

(☆↓)「宙を行く海老蔵父子や夏歌舞伎」∴三段切れを避けたい

〇点

たそがれの街影絵めく蚊食鳥

孤舟

(彦・五・允・三)

腕白のつんつるてるんの藍浴衣

全

(彦・弘・允・天)

☆ 雲海の波立つかなた富士浮かぶ

一灯

(万・千・ゆ・充)

(☆↓)「雲海の波立つ彼方富士浮かび」

〇点

◎ 子らはしやぐホースの水で虹立てて

全

(孤・千・敏・M)

老優の藝談酒脱夏座敷

亜也

(堅・紀・敏・く)

☆ ◎ 砂浜に日焼け女子寝てウエルダン

昇

(万・孤・千・灯)

◎ 舟唄や緑したたる最上川

紀久男

(孤・允・正)

☆ 落陽を背負ひヨットの戻り来る

孤舟

(敏・允・天)

☆ 昼寝にも快気祝いの酒の夢

忠彦

(紀・万・ゆ)

(☆∴「祝い」↓「祝ひ」)

〇点

☆ ほろ酔いも流れる汗に失せる宵

啓子

(紀・万・龍)

(☆∴「酔い」↓「酔ひ」)

☆ 西瓜切るそよとも吹かぬ風の日

全

(紀・五・敏)

☆ 星祭妻迎船漕ぎ出づる

規雄

(万・彦・三)

(☆↓)「七夕や妻へ漕ぎ出す迎船」

〇点

☆ 気怠さやラテン音楽夏夕べ

全

(万・保・く)

(☆↓)「夏夕べ気怠しラテンのリズムすら」

二点

☆ 羅(うすもの)で語る実らぬ恋の果て
☆ 汗したたる初金星の業師かな
(名古屋場所の宇良)

けい子 (万・龍・く)
紀久男 (万・允)

黎明の朝顔市の湿りかな
幾千の底紅落つる闇深し

孤舟 (真・天)
五郎太 (紀・正)

☆ 青田波寄する青松驚翔てり
(☆↓「青松へ青田波寄せ驚翔てり」)

一灯 (万・く)
昇 (万・孤)

洗ひ髪吹く夕風やリンスの香

全 (千・M)

☆◎ 向日葵の群れの視線を受けて立つ
(☆↓「群生の向日葵としばし真向ひぬ」)

けい子 (五・M)
天牛 (紀・万)

下駄音や遠く近くに祭の夜

全 (千・M)

☆ 古戦場三方ヶ原の新じやが来(く)
(☆…下五↓「新馬鈴薯(しんじゃが)来」)

盛雄 (万・孤)

☆◎ 人智及ばぬ虚しさや夏出水
(☆↓「虚しさや人智の及ばぬ夏出水」)

盛雄 (万・孤)

沖繩に二十万の骨油照り

盛雄 (正・天)

夏猛る南も北も区別なく

そらお (猛)

☆ 濁流に呑まれし田畑梅雨長し

全 (弘)

☆ 涼しげに父子の宙乗り大当たり

紀久男 (万)

☆ 河鹿鳴く銀山湯宿に飲みあかす

全 (堅)

☆ 汗みずく頭ヒリヒリ今日此頃

全 (万)

☆ 茄子漬や憂いを忘れて酒すすむ
(☆…中七↓「憂ひを忘れ」)

全 (万)

七夕紙に「じいじなおい」と読める文字

忠彦 (三)

林立のヨット太陽族の浜

全 (紀)

☆ おならだと孫の喜ぶ夏休み

孤舟 (灯)

無風なる己悟るや出水川

五郎太 (紀)

☆ 鳳凰の襟章輝る大暑かな

全 (三)

☆ 力なる己悟るや出水川

健介 (堅)

☆ ダイビングしなふ手足の美しく
(☆…中七「しなふ」↓「撓ぶ」)

ゆたか (万)

雲の峰崩れ耀(かがよ)ふ富士の嶺

全 (M)

☆ 百日紅手折るやパキリと音のして

全 (灯)

☆ 水茄子の口一杯の甘さかな

啓子 (彦)

☆ 墓(ひき)の貌久方振りに玄関に
(☆↓「玄関に久方振りの墓の貌」)

けい子 (く)

☆ 万緑や生死一瞬の山津波

天牛 (万)

盛雄 (紀)

● 次回青葉会

八月二十四日(木) 午後六時〜九時 築地「紅蘭」(HP参照)にて暑気払句会

▲ 当季雑詠五句 投句二句 会費ラ長

九月二十八日(木) 文京区民センター

以上 文責 紀久男

一 今回は天牛さんから7名出席。 投句12名。 紙上選句は先生含め14名。 孤舟選者から実施することになった社友会HPの特別企画「季節の写真を見て、一句！」の掲載頁二枚のコピー配布。 秋の風景写真三枚（写真部の榎原等さん撮影）を見て句を作って投句を募ることにつき協力要請。 万里子先生からの一筆箋、芳博さん奥様からのお手紙等を回覧。 小生の山形土産、純吟「親父の小言」（福島浪江町の酒蔵が山形の蔵を借りて造った）と「最上の夢」を賞味し乍ら開始。 猛さんの司会で御覧のように堂哉さん恵洲さんが高得点。 ゆたかさん健介さんも好成績でした。

二 関係者近詠

葉芽花芽太古から日々背伸びして	万里子	憂さ払はんとてがむしやらに髪洗ふ	恵洲
風も無く音無く落つる乙女椿	全	—NHKラジオ7月8日放送	西村和子選
曇天に基地への轟音待降節	全	（スタジオの選者から電話入り「生出演」）	
野蔭の葉裏返り通し上水縁り	全	チューリップ一輪仏花を明るくす	恵洲
季移りの速さや明日は花祭	全	—「NHK俳句」七月号	西村和子選
花散るや宙を左へ地を右へ	全	呑み込めぬ話も飲んで心太	正明
天心の満月おぼろ米寿祝	全	世の中は付かず離れず水すまし	全
手間の詫び添へて小鯨を手渡さる	眞希子	今暁は穏やかに寄す夏の波	全
新築の若木を鼓舞して鯉幟	全	（劉暁波氏の死を悼みて）	
母在せば表札は亡父君影草	全		
母の胸にしやくり泣き沈め若葉風	全	一村をすつぱり包む夕立かな	允章
皮剥けば姫と呼びたき初筒	全	深閑と真昼の園や夾竹桃	全
白百合や祈りへ深く膝を折る	弘子	遠雷やちびりちびりとブランデー	全
近く来よ小首傾げよ雀の子	全	風薫る行方決まらぬ蔓の先	彦十
愛犬へ吹くハーモニカ桜の実	全	大川を渡る明け暮れ夏燕	全
はるばると林檎の花に会ひにゆく	全	色男にや見えぬ大足桜桃忌	全
夏の暁妻の寝息のありにけり	青史	その昔の人喰ひ川なり五月果つ	全
粽結ぶ指たをやかに笹じめり	全	なんとまあ神田川にもカワセミが	稻垣真澄
胡瓜揉むあるべうもなきことなりき	全		
翼あらば引鶴追うて北へ飛ぶ	全		
淡彩のはけのをちこち山桜	紀久男		

—「森の座」八月号

三 「自詮・松浦加古集」より小生好みを抄出してみました。

海恋し鴟多き地に慣れゆくも	花の夜の語られ続く生死かな
鯖雲を繰り出してをり樗大樹	円空仏に金粉降らす山の火蛾
風絶えて夜の山々の姪始	極月や舞台に死者の蘇る
山霧や今歩かねば道消ゆる	鶴鴿の蛇と闘ふ静けさよ
ちちははと雪の昼餉のきなこ餅	背伸びして墓に見える冬海
全山の力抜きたり朴落葉	枯るる色いとほし枯るる音さらに
	未知の地へ己れ放たん青嵐

四 昨年七月亡くなった永六輔（俳号・六丁目）遺句より小生好み八句。

鰻待つ間に話がこじれたり	七五三八九三の孫も愛らしく
ずつしりと水の重さの梨をむく	夏場所でグルジアロシアを叩きつけ
寒月が三つに見えて終電車	呑む打つ買う卒業をして認知症
その昔坐れば牡丹今立てず	看取られる筈を看取つて寒椿